第１回　歴史文化基本構想連絡協議会　　H30 年 6 月 27 日＠京都市東山区役所

有識者によるパネルディスカッション

「歴史文化基本構想連絡協議会」の第１日目、有識者５名に「歴史文化基本構想」を観光にどう生かすべきかについて議論をいただきました。このパネルディスカッションは、連絡協議会の参加者（市区町村の担当者）が４グループに分かれて、「歴史文化基本構想」策定後の活用について、１日目、２日目を通して自由討議を行うのに先駆けて行われました。

【コーディネーター】

西　村　幸　夫　神戸芸術工科大学教授

【パネリスト】

池　邊　このみ　千葉大学大学院園芸学研究科教授

菊　池　健　策　東京文化財研究所客員研究員

佐　藤　千　晴　フリージャーナリスト

西　山　徳　明　北海道大学観光学高等研究センター長

【西村】

それではよろしくお願いいたします。こういう連絡協議会は、ぜひとも必要じゃないかと思っておりました。特に、今回の文化財保護法改正に伴う、文化財保存活用地域計画（以下、地域計画）につながる歴史文化基本構想（以下、歴文構想）が今後どうなるか、この連絡協議会がどういった形になっていくかは先が見えないんですけども、いずれにしても今後地域計画が様々な地域で作成されると、連絡協議会の取組は非常に重要になってくると思います。歴史文化基本構想を活用した観光拠点づくり事業（以下、「観光拠点づくり事業」）だけの話をすると世界が小さくなってしまうので、本来この歴文構想がどうあるべきかということと、その路線のもとに観光にどう生かしていくかということをつなげて話してもらった方が、広がりがあっていいと思いますので、そういった形で、まずはパネリストの方々にご意見をいただいて、少しディスカッションしていきたいと思います。

それでは西山さん、まずはよろしくお願いいたします。なお、今日は「さん」づけでいきたいと思います。

【西山】

今まさに西村先生がおっしゃったように、今回は単に「観光拠点づくり事業」のためだけの連絡協議会ではない、と思うところもあり、また私ですが、平成 19 年の文化審議会文化財分科会企画調査会（以下、企画調査会）に参加させていただいていたこともありますので、今日は、改めて記念すべき日だと感じます。特に歴文構想を今から作りたいという自治体の方々を集めた研修会は毎年実施されていますが、既に策定した自治体の方々が、策定して既に色々な経験を積まれた方々が、一堂に会することはこれまで無かった訳ですから、本当にこの大切な会に私も呼んでいただき、身の引き締まる思いです。

あくまでも私の理解ですが、これまでの文化財行政というのは、要するに、文化財の価値の優劣を評価して、つまり相対評価ですね、優れたものから順番に指定し、そして、それを予算の範囲で、税金を使って保護していくというものでした。ですから、逆にいうと予算の範囲で守れないものを無闇に指定できないという宿命がありました。角のある言い方かもしれませんが、私はそう理解していました。日本の文化財保護体系というのは、世界に誇る本当に素晴らしいもので、ユネスコなどが 90 年代に文化的景観という新たな概念を作った時代に、日本はすでに史跡・名勝・天然記念物や、有形・無形に関しても保護体系を持っていて、日本の文化財保護体系そのものは、私は世界的にも先進的で裾野の広い素晴らしいものであるということを、まず大前提で考えています。

しかし、それは、私が今申し上げたとおり、少数優品主義という言い方もされますが、要するに専門家やその道の権威が調査し、相対評価に基づいて優れたものから指定して守っていく、指定した以上は、そこに行政は責任を感じ、責任を持って保護していくという、これが従来の、いわばトップダウンの日本の文化財保護であったわけです。保護制度としては、さらに 1970 年代以降、伝統的建造物群保存地区制度をつくり、登録文化財制度、文化的景観の保護制度などをつくることで文化財の裾野を広げていくという方法をとってきたと思うのですが、そこで立ち止まり、平成 18 年、平成 19 年の企画調査会で議論されたのは、世の中で実際起きている遺産の喪失という現象が、そうした新たに広がっていく文化財の指定や登録などでは到底追いつかず、地方・地域においては、桁数でいうと２桁か３桁くらい違う数値で無くなっているということです。ただそれら失われていっている遺産は、確かに従来の文化財の考え方、

物差しでは拾いきれないものであって、仕方がない。高度経済成長からこっちは、指定したものをしっかり守る、逆に言うと指定するということは指定されていないもの、つまり、壊していいものを決めていっていることでもあった訳です。結果として、高度経済成長が終わりました、バブルもはじけました、今度は相続の問題とか色々な問題で悲しいほど遺産がなくなっている、地域の文化資産がなくなっているという中で、平成19年の企画調査会で歴文構想という考え方が出てきた時、そうではなくて、今後は、絶対評価で「いいものはいいじゃないか」、「大切なものは大切」とはっきりさせたら、それをみんなでなんとか活用し使いこなすことによって、結果的に残していけるのではないかという発想だったと思うのです。従来の少数優品の相対主義から絶対評価で惜しみなく拾い上げる考え方への発想の転換です。しかし、拾い上げたものが、文化財保護行政で責任を負って守るべきものと思った途端にみんな二の足を踏んで、選べなくなり、登録のリストアップもできなくなってしまいます。なので、文化財行政の方々も、保存の義務という肩の荷を一旦降ろしてみる。そしてみんなで遺産の存在を、ただ知ることが大事です。それが存在しているということ、価値を知ることによって、それを使いたいと思う人が、それを活用していく。あーそうだったのか、大切なものだったのかと気づいた所有者が今までよりも、ちょっと高い意識をもってそれを伝えていく、そうしていくだけでも、全国で毎年一万件くらい掘られて、記録保存で終わっている埋蔵文化財よりは、はるかにたくさん残っていくはず、歩留まりがあるはずです。逆に言えば、登録されたものがなくなっていってもいいんだけど、保存するために登録するんじゃなくて、そういうものをみんなで拾い上げる。そして、それをみんなで使いこなす、それが結果としてより多く残されていくというような、まさにボトムアップへの発想の転換です。ですから比べる必要はない。その地域にとって、そのまちにとって、その人にとって大事なものは大事なんだと。ただ、みんなで守っていこうというものを、最低限のフィルターにはかけて拾い上げていって、それをみんなで活用していきましょうという、これが基本だったと思うんです。ですから、相対評価から絶対評価への発想の転換とか、地方分権といっても、口だけの地方分権ではなく、本当に地方、地域の人たちが考えたものを大事にしていこうという考えです。

日本の「ビジット・ジャパン・キャンペーン」などの観光施策が2000年を過ぎてから色々と出てきて、そういう中で、やはり文化財の活用というものに、特にこの5～6年、非常に注目が集まるようになってきました。だからこういう観光拠点づくり事業も文化庁が事業としてつくるようになるに至ったということだと思うのです。そういう意味において、観光というのが非常に活用の中で今最も注目を浴び、重要視されるようになってきました。観光そのものは、昔から日本は結構得意で、観光業界というのは、日本の有り余る豊富な資源を、本当にある意味、上手にコーディネートして、どんどん観光商品をパッケージ化して観光産業を成り立たせてきたのです。この時代、これだけ文化財が、すごい勢いで観光に使われようとしている中で、文化財行政に関わる我々、ここにいらっしゃる方々が何を考えなければならないのかを問われている。これが、もう一つこの観光拠点づくり事業の大事な側面だと私は思います。

ですから、今日、村上調査官が最初にプレゼンテーションされていましたけれども、やはり、本当の価値を拾い上げることが重要です。先ほどいった絶対評価というのは、いいものはなんでもいいということではなく、ちゃんと、そこに科学のメスを入れて、要するに文化財というものの価値評価という客観的視点を入れて、そして、それを拾い上げる。そしてその真正な本当の価値というものをきちんとデータベースとして記述しておけば、改めてそれを観光に使うにせよ、教育に使うにせよ、それから景観づくりなど、色々と使うにしても、非常に重要なデータベースになると思うのです。ですから、むしろ私はインタープリテーションという言葉が大事だと思うのです。価値と観光を繋ぐ言葉としての「インタープリテーション」。要するにその本質的な価値、ものの価値を如何にちゃんと伝えてあげることで、訪れる人、それを享受する人に、より深い感動を与えることで、結果として財布の紐を緩めさせるというふうな話につながっていくのです。

そういうことを改めて、今回考える中で、今日最初に文化庁の伝統文化課の菅野課長補佐からお話のあった、この新しい地域計画への記載事項で、当該市町村が講ずる措置

の内容、ここが私は非常に今回、実際の運用上、興味があるというか、どうなっていくんだろうかと思う点です。要するに、「市町村が講ずる措置ってどんなものなんだろう」となったときに、どうしても従来の発想だと、歴文構想でつくった関連文化財群や保存活用区域に対する保護のためのお金、保存とか修理のためのお金があれば、措置がなされるのかなと思いがちですね。でもさっき私が申し上げたとおり、もともとの発想が活用する中で結果として残っていくということ、あるいは輝いて光っていくという話ですから、この措置の内容というのが、直接の保護、いわゆる保存や保全のためのものとなるのか、あるいは「活用による保存」という、従来の文化財行政とは違う側面からこの措置というものが明確に位置付けられるのかということです。後者なのであれば、明確に法に基づいた、より安定的でより適切な評価に基づいた措置が従来の保護行政に加わり、それに対する国の補助も新たに用意されていくというふうになっていってほしいなと考えております。概念的なことですが、私からは以上です。

【西村】

ありがとうございました。佐藤さんに感想を含めてお願いいたします。

【佐藤】

今日の前半の事例発表を聞かせていただいて、この歴文構想というのは、まず地域の人たち、地元の人たちが、自分たちの地域の持っている文化財の価値に気づき、あるいは価値に気づいてもらうためにとても活用されているんだなということが強く印象に残りました。例えば津和野でしたらば、観光という外向きにアピールする段階でこういう政策をやるんですということを町内全部にパンフレット配布して知ってもらう。それから高砂でしたら、小学校・中学校の授業の一環でふるさと高砂学というプログラムを作って子供たちが学ぶ機会を設けている。こういう動きってすごく大切だと思うんですね。まず、地域のみなさんが自分たちの持っている宝物の価値を知る。それからボランティアガイドなんかはその一つの典型でしょうけれども、それを語れる、人に伝える力を身につける。それが歴文構想の前半戦でとても大切だと思うんですね。その上で、観光拠点を作って、外から人を迎え入れましょうということになってくるんだと思います。

その時に、観光拠点を作る上で、大切にしていただきたいなと思うのは、よそ者の視点です。地域の皆さんには、見えていない価値が見えるかもしれない。あるいは、地域の皆さんが知っていること、わかっていることがよその人にはわかりません。これはなんですかと聞かれることで、観光のルートを設計するにしても、自分たちが当たり前だと思っていることが、観光客には当たり前じゃないんだってことに気がつくきっかけにもなりますね。だからどこかで橋渡しのように、モニターツアーでもちょっと離れた地域の人たちに来てもらったり、あるいはそういう観察をして意見を言うことに長けているまちづくりの若い世代の人たちに来てもらったりが大事です。私なんかが見ていても、まちづくり関係の人々はとても元気がいいんですね。文化財とはちょっと理想がずれるんですけれども、そういう人たちを呼び込んで、一緒に何かやることを通じて観光拠点にいく次のステップ。価値を知る、外向けに発信する、準備をするというところに繋げたらいいんじゃないかなと思いました。

【西村】

ありがとうございました。今おっしゃっていただいたのを、私もそう言われてみれば、今日はそれぞれの地域でそれぞれの戦略がありましたよね。例えば、東近江市だったら、色々なことに手を広げるよりも、聖徳太子に絞ってやるという。そういう知恵というか、アプローチの仕方も、共有したり、お互い知ることがこういう連絡協議会の意味になるのかもしれないですね。

わかりました。はい、では次行きましょう。菊池さん、お願いします。

【菊池】

先ほど、事例報告を伺っておりまして、我々は総合的に把握、あるいは地域ということを言っているんですけれども、その時に時間軸を意識して把握するというのは、なかなか難しいのかなと思っていました。どちらかと言うと、ある時代、ある文化を、輪切りのように切り取ってきてそこでそれを素材として使おうというふうに、そういう取組が、当然のごとく多いのかなと思って、お話を伺っておりました。

もう一つは、私の専門が民俗文化財なもんですから、文化財の中で民俗文化財だけが、有形と無形の両方ある文化財なのです。その中で有形のものは、形がありますので、なんとか残っていく部分があるんですが、無形のものは非常に厳しい状況にあると考えています。というのも、無形は人がいてこそ存在できる文化財だと思っておりまして、その人が日本の地域で、特に中山間地域から、少なくなっている。ある時、何十年ぶりかで、学生時代に調査に行ったところに出かけました。そしたら、家の数はほとんど変わってないのですが、祭りの時に出てくる人たちを見ていたら、人の数が減っているんです。それともう一つは、10年、20年の間、本来交代すべき役割を、同じ人が担っているんです。そういう意味では、なぜそうなのかと思って、あとで聞いてみたら、人がいない。歳をとってくると次の若者に引き継いでいくのが、引き継げなくなっている。そういう状況の

中で、本日、歴文構想をまとめられた、あるいは地域計画の作成を進められているところの話を伺っていますと、中々無形の話が出てこない。高砂市の報告の中で、一つだけ祭りという言葉が出てきたんですけど、そういったことを一つ、例にしながら、基本構想、地域計画が立てられるといいなと思っておるところでございます。以上でございます。

【西村】

確かに、おっしゃるように、民俗文化財、無形の話が少なかったですよね。無形の話をすると、菊池さんがおっしゃったように、担い手の話になるので、全然違う課題が出てきて、そこがなんとか解決しないと、全然、守れるものも守れないですね。だから、そういうものも計画の中に必要だということですよね。

【菊池】

そうあってほしいなと思いますし、そういう思いで実は、民俗文化財もこの歴文構想がスタートする時の議論の中で出てきたと思っています。

【西村】

思い出してきました。それでは最後です。池邊さん、お願いします。

【池邊】

先ほど、西山さんが、連絡協議会、記念すべき日だとおっしゃりました。こういう連絡協議会をすると、色々な質問がでてきます。日本人っていうのは、どうしても、問題点と課題って大好きなんですね。一生懸命反省するんです。でも、それって、中々解決できないから、こういう連絡協議会にあがってきてしまうんですね。特に歴文構想は、色々な部門との関係があります。また、過疎だとか、限界集落とかで困っているような集落での話もあります。そうすると、私は、ぜひ、これからの次の自由討議の時に、歴文構想って何がいいんだろうかと、どんなところが自分たちがやってよかったと思うのか、考えていただきたいです。策定数を見ますと、実は私、国交省の方（歴史的風致維持向上計画）もやっているんですけれども、２倍近くも文化庁さんの方が多くなってきているんですね。これだけの市町村さんが、皆さん一生懸命、時間をかけて作っている。それがみんなのためにどう生かされているんだろうかということを、次に考えていただきたい。それから、一方で、ボトルネックになっているところがあり、そういうところは、もちろん、文化庁さんや他の省庁さんにも協力していただかなければならないんだけれども、そこを突破することが、市町村そのものの、地域活性化に結びつくところもあるんですね。例えば金沢市さん、とても今、すごく観光が盛んで、京都市さんに勝るとも劣らないところになってますけれども、あそこは、生涯学習課さんと、都市計画課さんの課長さんを２年で交代させる人事交流を行っているそうなんですね。やはり、今日のような問題というのは、文化財だけの人間だけでもだめ、観光の人も入らなければだめ、都市計画課さんをはじめ首長部局の色々なところを含んでいく。そういった意味でのボトルネックをどう越えていくか、というのも、ひとつかと思います。そして、最後には、歴文構想を、うまく地域に根付かせるツボみたいな、そういうツボの事例集みたいなもの、例えば、こんなツボをやれば、住民の人たちが反応したよというような、小さなことかもしれませんが、そんなことを、後の自由討議でやっていただきたいなというのが一つです。

←池邊このみ先生

あともう一つですが、文化庁さんが今まで、厳しい規制と言われていたことが、ここ 10 年で、「利活用」それから「ストーリー」、という２つを口にされるようになり、大きな転換をなさいました。その２つのことっていうのが、今の日本遺産というものにも繋がっています。日本遺産というものに対して、色々な人たちから、文化財をやっている人間からも、是非があることも、文化庁さんもご存知だと思っています。でも私は、文化財って、今何がないって、お金がない。それはなんなのかというと、まずファンがいないんです。ファンの人はみんなお年寄りばっかりで、人の活動もなければ、お金もない。サポーターになっている人も全然いないわけですよね。今、ロシアでワールドカップやってますけれども、やっぱりサポーター、ファンを獲得すること。それをやると何がいいのかというと、首長さんや議員さんが、なんかこの歴文構想っていうのをやるといいらしいよと、という感じになる。実は私も色々なところでいくつかの市町村から、国交省の法律（歴史まちづくり法）のことを、どういうふうにやったらできるのかと、どうやったら計画策定できるのかとか、議員さんに説明する機会があります。文化財の部門とか、昔でいうと、教育委員会っていうのは、治外法権のような、市町村の中では、そういう感じだった時もあったと思います。でもそれが今、まさにこの 10 年で、すごく変わろうとしている時だと思っていますので、そういった意味で、「歴文構想を知らないと、俺、首長やってられるの？」、「他から聞いたけど俺知らねえや、こりゃまずいぞ」、というふうに、今日来られていない自治

体の首長さんたちが、どんどん言い出して、まさに、地域の誇りというのを、自分たちから掘り起こしていくという、その気概を持つっていうんですかね、それをやることが日本が元気になる。外貨獲得だけではなくて、やはり日本が元気になる。そういうことが、文化財をまさに守っていく力になるのかなと思っていますので、ぜひ自由討議でそんな話を皆さん方としたいと思っています。ありがとうございます。

【西村】

ありがとうございました。サポーター、ファンを増やすというのは、確かに、観光の話をすると、守るという以外は、壊れるんじゃないかという話になるし、二項対立になりがちなんですけど、そうじゃなくて、サポーターを増やすために何をやるかっていうふうに考えると、すごくわかりやすいですよね。

【池邊】

そういうふうにすると、ファンの方々が、壊すわけでもないし、まさに二条城なんかはいい例だと思うんですけれども、まずは二条城っていうところで何か面白いことをやっているんだと。行ってみようという、まずファンを獲得されて、それから今度は、それをやる側に入ろうかというような形のサポーターが出てくる。そういう人材は文化財にどんどん出てきて、そこに若い人たちが文化財に対して、何かアクションをかけて、美大の子たちが、保存する。修復の勉強じゃなくて、文化財に対して、自分たちの現代アートをぶつけてみようとか、そんなイベントなんかも、生まれてくるといいかなと。

【西村】

新しいものの見方で文化財をみると、違う局面が生まれてくるかもしれないですね。ありがとうございました。

では、もう1ラウンドできるので、西山さん。平成19年ですか、前の企画調査会で歴文構想をつくる時に、いろいろ言った方なんですよね。私は「歴史文化マスタープラン」と名付けたらいいと言ったんだけど。それが、こういう形になったわけですが、それからずっと見て来れられたので、その意味では、10年以上経っているわけで、最初のその思いと、今の状況は変わっていると思うんですね。今から見て、この10年どうだったかという話と、それから少し具体例も含めて、何か言っていただけるといいかなと思いますが、どうでしょうか。

【西山】

はい、わかりました。歴文構想というのは、とても柔らかい考え方から生まれてきたもので、モデルの20地区のうち、私はいくつかのところしか関わっていませんけど、それでも本当にいろいろでした。いい機会だと言って文化財の悉皆調査をすることに情熱を傾ける担当者の方もおられたし、これを機会に自分たちの地域のブランド化を図るために、改めて自分たちの地域の歴史文化の特徴・魅力について、色々な専門家を集めて、議論を始めた方もいた。あらゆる文化財類型の専門家を集めなければいけない、というのが、構想策定の一つの条件でもありました。どうしても自治体の担当者の方って、そんなにたくさんおられないし、ましてや専門分野が多岐にわたるので、それぞれの自治体で、専門が偏っていた。だけど、歴文構想を作るとなったことで、無理してでも自分の不得意な分野の先生方にも来ていただいて、改めて悉皆調査とか、ワークショップとかをやってみると、思わぬ人の繋がりが出てきたりしたのです。実はこの話は、尾道市からヒアリングさせていただいたときの内容なんですが、そういうふうな思いもよらない効果と、それから担当者が専門としないもので、後ろめたいといったらなんですが、ちょっとそっちの方は無理だよなと思っていたようなことに対して、改めて光を当てることができることで、すごく気持ちがスッキリしたということもあったようです。自分の地域の歴史文化・文化財に関わることが、逆に展開したとみることができるわけです。その辺に私は非常に予期せぬ効果があったと感じますし、そこに日本遺産とかも乗っかってきました。日本遺産に関しては、確かに賛否両論あるかもしれませんが、そこで一生懸命私たちも、自分の地域の遺産の価値を説明しようとしたわけです。世界遺産にしたいと思って日本政府や推薦地域が頑張るのも一緒ですけど、やっぱり地域が自分たちの魅力とか価値というものを一生懸命、他人に分からせよう、分かってもらおうとして、しかもちゃんと科学のメスを入れて、説明していくということで、この10年間で、そういう意味で文化財の分野を超えた裾野が広がって、ネットワークもできて、いよいよ今からこれらをどう生かしていくかっていうスタート地点にあるというふうに私は思います。

【西村】

ありがとうございました。個人的なことを言わせてもらうと、私がこれは大事だと思ったのは、ひとつには、日本の文化財はジャンル別にやっているじゃないですか。史跡

西村幸夫先生→

があったり、名勝があったり、建造物があったり、埋蔵文化財があったり、無形だったり。まったく縦割りだから、文化庁の悪口を言うわけじゃないけど、それぞれバラバラだし、あんまり仲良くないしね。

でも地方の現場は、それら全部が一つになるわけです。例えば、ある地形の、ある谷間に色々なものがあると。つまり一つのすごいミクロコスモスを作っていると思うんですよね。こういうのを評価する視点って、ないわけですよ。それぞれ建造物は建造物ってやってるから。その縦割りでずっとやる限りは、こうした発想はまったく出てこないんですね。それは、仕方ない時もあるんです。国だから。でも、地方は、全部合わせて一つの現場があるわけだから、海があって、山があったり、谷があったり、川があったり、そうした地形の中にも一つの世界があるわけですよね。そういう中で文化財全体を見てみると、何か見えてくるんじゃないかなと。それは今までやってないし、国ではやれないから、地方でしか、現場がある人しかやってないわけです。そういうものをやれるようなものをつくるべきだと主張しました。それを現場に任せるべきだという動きを西山さんが色々なところでやってこられて、そういう思いがあるんですよね。

そういう意味でいうと、こういうことが進むことは非常に大事だと思うんだけど、あんまり観光、観光と言われるとね。それ以前にもっと本質的なものがあるんじゃないかと思ってしまいます。そのもっと本質的な問題をうまく進めたい。今日のプレゼンテーションにもありましたけど、そういう価値がわかったら、人に言いたくなりますよね。「だからこんなに大事だと思いませんか」と言いたくなるのが、言葉を変えれば観光みたいなものだと思います。外の人にうまく言えるように。そこのところがうまくつながると、今やっていることと、観光がごく自然につながっていくんじゃないかと思います。それを観光業者的な発想でやられると、なにか違うものが接合してくる気がするんです。その辺、西山さんどうですか。観光の専門家でもあるじゃないですか。お願いします。

【西山】

はい。私は８年前に北大の観光学高等研究センターに赴任したのですが、それまでは建築系の学部にいました。今、西村さんがおっしゃる通りで、今のこの連絡協議会をどういう方向に展開していくかは重要です。ここは、基本的に文化財サイドから観光ということにどう取り組んでいこうかと悩んでらっしゃる方が多いと思うのですけども、さっきも申し上げたように、ともかく観光業界の人たちは、地域の資源を寄せ集め、悪い言い方をすればつまみ食いをして売れる旅行商品を作る。私の見てきた観光の世界というのは、非常に厳しい、過当競争の世界です。日本には、本当に全国津々浦々色々な資源があり、地域は、何とかうちの資源もパッケージ・ツアー商品に入れてくださいと頼むのですが、エージェント側はそれをつまみ食いして、売れそうな魅力的なものだけをパッケージに入れ、売れなくなったら切り捨てていく。売れるものはとっておく。大名商売といったら非常に失礼ですが、地域を育てるとか、資源を磨くというようなことはやらなくても十分生きてこられたのが、これまでの観光業界なんです。今、ややもすると、この流れの中で、どこかの大臣が学芸員はなんとかだと言うような、全くナンセンスな、ものがわかっていない雰囲気の中で「文化財の観光利用を」となると、やはり「文化財の人たちは観光の素人だから、観光事業者のことやマーケティングのことをもっと勉強しなさい」みたいな、どうもそういう雰囲気になってしまうのです。しかしもちろん、餅は餅屋で、マーケティングは、得意な人たちにやってもらえばいいと思います。そういう方はたくさん世の中にいるわけですから。ただ、その商品化するという、私最近はもうあまり気にせず使えるようになりましたが、やっぱりみなさん、ちょっと違和感ありますよね。「商品化する」なんていう言葉には。でも観光業界では商品化しないと売れない。売れてなんぼですから。そういう意味では、ちょっとこの言葉のいやらしさは置いといて、やっぱりこの商品化するプロセスの中で、本物をちゃんと売る、本当に息の長い商品を作ろうと思ったら、本当の価値をきちっとそこに組み込む。そして、そんな難しいこと言っていたら商品売れませんよというような観光系の人間に、ちょっと黙って聞いてと言いたい。これが大事なんだということを、ちゃんと面白く伝えるということですね。それをできるのが、まさに文化財側から価値にコミットしている人で、そういう人にしかできないと思うのです。そこをどううまく繋げるか、私の研究の目的はそこにあります。さっき私がインタープリテーションと言いましたが、さっき西村さんがおっしゃっていた、こんないいもの見つけたら自慢したくなるよねって、その自慢の仕方が下手くそだったら、人は理解できない。ちゃんと説明したら、きちっと理解してくれるという、その快感というか、合理的なあり方ですね。そこがまさに、この文化庁が旗を振ってやるべき観光振興のエッセンスじゃないのかなと思います。ですから、文化財関係の方がいわゆる観光のことに精通するという、観光ってそ

西山徳明先生→

んなに深い世界と私は思わないので、やっぱりそれなりに勉強すれば、マーケティングのこともプロモーションのことも理解できるし、ノウハウも身につけられます。しかし、逆はできません。マーケティングの専門家が、文化財の価値の本質を説明することは、容易にはできないのです。ですから、この価値にコミットする専門性、あるいは、そういう専門分野とか、部署というものが、しっかりと観光ということに向き合っていくというか、観光側も歩み寄って、この価値に気づく、必要性に気づく。それが結果として持続性につながり、いい関係に私はできると思いますし、なってほしいと思っています。

【西村】

ありがとうございます。価値にコミットする人たちが、観光にもコミットする。じゃあ佐藤さん、続きでお願いします。

【佐藤】

今、観光事業者のお話を聞いていて、ちょっと思い出したんですけど、私の知人の観光会社の方が嘆いてました。自分たち観光事業者の全く目に触れないところで大阪に来るインバウンドがどれだけいるか、と。というのは、大阪はアジアからの方が多いですから、皆さん格安エアラインで来ます。そこに大手観光事業者が入る余地はありません。それから、宿の手配も Airbnb（エアビーアンドビー）ですね、もう民泊です。スーツケースを提げて地下鉄に乗って「何でこんなところに観光客が」という大阪の近郊にも、日本語を話せない方たちがたくさん、楽しそうに歩いています。じゃあ、彼らがどこに何を見に行くかっていうのも、最早、大手観光事業者の予想を超えたところで流行が細かく変遷しつつあって、例えば今日は京都の二条城のお話でしたけれども、今伏見稲荷ってインバウンドにめちゃめちゃ人気スポットですよね。何で人気スポットなのかわかんないんですよ。ちょっとエスニックだから？でもエスニックなお寺とか神社いっぱいありますよね。SNS で火がついて、誰かが行ってきて「いいね」っていうと皆が行きたがるっていう雪だるま式に人気スポットになっていくところが結構出てきていますね。ということは、みなさんの地域の宝、今まではたくさんの人は知らなかったけれども、まちの人はとても誇りに思っているものがそういう人気者になる可能性ってすごくあるんですよね。その時にやっぱり発信の仕方が、すごく大切になってくると思うんですよ。下手なプレゼンテーションでは宝物も光ってくれません。観光拠点づくり事業で私も面白いなと思うのが、必ず協議会というものを作るんですね。文化財行政というのは教育委員会主体で比較的専門性の高い、限られた人たちの間でされてきたんですけれども、協議会のメンバーには、いただいた資料で言うと、観光の世界の方もいます、企業もいます、

佐藤千晴先生→

地域住民もいます、教育関係者もいます、色々な立場のステークホルダーが一つのテーブルに集まるコアになりました。文化財の関係の方が、これを生かさない手はありません。新しい展開をすごく楽しみにしています。私は、文化は文化でも文化財の「財」のつかない、形のない舞台芸術とかパフォーミングアーツとかそちらの仕事が長かったんですが、新聞社でも考古学屋さんっているんですね。文化財の専門家。同じ部署にいても話が合わない、まさに役所で皆さんが直面していることが新聞社の中でもありました。でも、その「財」のない文化屋さんである私が、みなさんの発表を聞かせていただくと、例えば伊勢原市ですね。ああ、大山詣りって時代小説でよく見るよねとか、大山詣でが出てくる有名な落語あったけど、地元でそんな落語会やってるのかなとか、文化財プラスどんなコトが起きるのかっていうのがとても気になります。これから観光拠点を作っていく時に、場所はあるし、宝物もあります。そこに人を惹きつけるには、もう一つ何か、魅力的な語り部がいるとか、面白いことが起きるとか、発信力があることがあったらいいなと思いました。

【西村】

なるほどね。まさにそうですよね。モノの話が中心。我々もそうだけど、反省しないといけないけど、そこに何が起きたとかそこが持っている物語みたいなものがうまく伝わるかどうか。そこが例えばそういう色々なネットで動いている日本の大手マスコミとかそうしたツーリストエージェントとか関係のない人たちにもうまく繋がることができるかもしれない、ということになっていくんでしょうか。

【佐藤】

そうですね。一過性に終わる危険もありますけれども、例えば先ほど東近江市の方が、太郎坊宮に拝観者がすごく増えているというデータを示してくださいましたよね。最近の東近江のトピックって、4 月に「ももいろクローバーＺ」っていうアイドルグループがコンサートをやって大騒ぎになったんですよ。東近江に収容しきれるかって人が集まっちゃって。その事前プロモーションで２月に「ももクロ」のメンバーが太郎坊宮に成功祈願に行きました。そうするとファンは後を追っかけて、東近江に行ったら絶対太郎坊

宮に行くでしょう。どこにどんなきっかけが潜んでいるのかわからないですよね。世代を超えて。

【西村】

それは非常に現代的なものも全部含めてってことですよね。それはちょっと教育委員会だけじゃ難しそうだなあ。まさに連絡協議会で色々な人をステークホルダーにしていくっていうことが大事だということですね。ありがとうございます。

【菊池】

今お話を聞きながらふと考えていたことがありました。実はここ１～２週間、喋っている時に「はて、これもしかすると連携図れるんじゃないか」と思っていたことがあります。というのは、歴文構想と、歴史的風致維持向上計画は、似たような計画なり、構想づくりなんです。考えてみたら、1970年代の頭のころから始まった「エコミュージアム」の考え方がまさに、この総合的把握そのものではないのかなと。あれをやるためには調査をして、何が資源として使えるかということを押さえないといけない。これを歴文構想とかと連動させてくると、お互いに足りない部分を補うようなことができるんじゃないかというふうに思っておりまして、更にはエコミュージアムでは、そのものではないと言いながら色々なところが作ってきた「まるごと博物館」とかすごく似たような感じの事業ではあるんです。それを、お互いうまく連携していくともう少し早く動かせるんではないかなというのを考えてまして、少し考えてみたらというのを若い人たちに言っていたところなんです。

もう一つは、実は今、週に１回、富士山の近くまで電車に乗ってとことこと通っております。その過程でですね、何でインバウンドがこんなに多いんだろうと思ってたんです。でも冬になって寒くなったら空くだろうと思って半分期待していたんですが、冬になっても人がいっぱい来るんですね。これは何でだろうと。無形文化財の祭りは年中行事ではなく年に１回ということが多いわけです。そうすると、観光資源として使おうと思っても年１回こっきりなんですね。まあやり方で色々できるはずなんですが、富士山の状況を見ていると、もしかすると無形と有形で使い方、資源化の方法論が違うのかもしれないなと考えております。

菊池健策先生→

【西村】

ということはその無形の方は計画の中に全くちがうアプローチで入れていくのがいいんじゃないか、と。

【菊池】

それができるといいんじゃないかと。何でそんなことを考えたかといいますと、例えばですね、秋田県の鹿角市というところがあります。北東部のまちなんですが、時々、秋田県民から「あそこは秋田じゃない」と言われるところなんです。というのは、近世には南部藩領、盛岡藩領だったので、そう言われているんですが、そこで８月の半ば過ぎにある祭りを見てたんですが、何と勿体ない祭りだろうと思ったんです。というのは、やってるのが、祭りの関係者だけで、それも、まちの人たちもほとんどいなくなる夜中にやっているんです。これを見るためには泊まらないと見られないんです。ところが、宿はまちに１軒しかありません。もっと作ればいいんじゃないかと最初は思ったんです。でも、駄目だというのに気が付きました。365日のうち363日くらいは祭りも何もないわけです。その間をどうやって生き延びるかという方策を考えないと無理強いはできないなと。で、そんなことがあって無形の文化遺産の、文化財の資源としての活用の仕方は少し有形とは別のものを考えないといけないのではないかというふうに思ったわけです。

【西村】

なるほど。さっきの富士山というのは、それは単に見に行くんですか？富士山を。何かいいところがあって来るんですか。

【菊池】

スタイルから見ると登る人たちがかなりいるんじゃないかと思うんです。見るだけはなくて山に。上まで行くかどうかはわかりませんけれども、途中まで登ってる方もいます。

【西村】

ありがとうございます。それでは池邊さん。

【池邊】

今、有形無形の話が出てきましたけれども、私の方の専門からいうと、自然遺産と文化遺産ということで、西村さんを前にしてあれですけれども、世界の中にはたくさんの方がユネスコを通して色々な文化遺産・自然遺産を知ったわけですよね。どの国もとにかく１つでも多くほしいということで、今、獲得合戦をやっているんですが、そういった中で私は歴文構想の面白さというのは、もの凄くバリエー

ションがあるということだと思うんですね。うちのまちには寺も神社も城もないよと。だけど緑があるよね、ということをやっているのが東京都の日の出町とかなんですけど。あと、よく私この歴文構想は２年生の授業課題にしていて、時々学生たちがびっくりするのが、北秋田の「マタギ」の文化で、私はこれは自分も推奨してるのにあまり知らなかった。でもこの「マタギ」の文化というのを北秋田がこれだけきちっと詳しく調べて、そしてそれを自分たちの子孫に伝えようとする、その素晴らしさというのはすごいなっていう、その力だけでもすごいなっていう感じがしました。ですから、歴文構想で文化財っていうと、多くの人はやっぱり国交省の方（歴史的風致維持向上計画）と同じように、城がなけりゃとか神社がなけりゃとか国の文化財がなけりゃってどうしても思ってしまうんですけども、そうじゃなくて自然遺産だとかさっき石の話もありましたし、それから「マタギ」もありますし、あと、モデル事業の時にとても感激したのが「鯖街道」ですね。「若狭の文化食にあり」というキャッチフレーズだったかと思うんですけども、食文化はあまり歴文構想に出ているのを見たことはないですけれども、そんなところもあったりします。あとやはり日本人っていうのは、石見銀山が世界遺産に登録されたのに、なぜ佐渡がならないのかというのを皆不思議がる。それは佐渡の方だけじゃなくて日本国民全員が不思議がってしまうくらい。多分、石見銀山は私も観に行きましたけれども、いわゆるテーマパーク型でないというか、そういうものに対する観光意識というのが、やっぱりインターナショナルにまだなってないっていうところがあると思うんですね。ですから私は関連文化財群という言葉がこれからも残るのかどうかわからないですけれども、自然から芸能まで全部含め、地域の自然資源から生まれた様々な産業だったり、そういう連関の方式みたいなものも含めた遺産のあり方というんでしょうかね。何でその場所にそういう遺産ができたのかっていう、そういうところをこの歴文構想の教育みたいなものを通して、日本の子どもたちにももう少しインターナショナルな目で世界遺産を捉えるような、そんなことも考えてみたらいいかなというふうに思います。

【西村】

食文化とか自然の移り変わりみたいなものをどういうふうに感じるかというのも文化的な面もあるのでね。そういうところまでも色々含めることができる、ということですね。

【池邊】

そうです。あ、それで言い忘れました。すみません。世界農業遺産はFAO（国連食糧農業機関）が作っていますが、漁業遺産は日本でもほとんどありません。まあ、伊根とかそういうところはありますけれども、なかなかその魚の漁労とそれから何て言うか、地域の伝統文化、本当は民俗文化財の中にたくさんあるはずなんですけれども、何故かなくなって。

【菊池】

いっぱいあります。

【池邊】

そうですよね。だからそこが私は全然今回の中でも、どうしても祭りとかそういうのにいって、漁労のところにいってないっていうのが、はい、是非お願いします。

【西村】

菊池さん、どうぞ。

【菊池】

多分それは、簡単ですね。世界遺産と言えば、私なんかがいたころには、世界遺産の構成要素、資産には民俗文化財は入らないということで、関わりがなくなっていたんですね。ただ海の漁業はかなりあり、川と湖のものも少しずつあります。多分、残念ながら伊根は一度資料を見に行ったんですが、まだまとまっていないというところです。ですから、無形の文化財もそうなんですが、他の文化財とセットで見ると非常にいいというところもあるんですね。例えば、これから間もなく祇園祭が始まりますけれども、祇園祭の時の一番山鉾が迫力ある姿で見えるのは戻り山の時。自分の町内に帰ってきた時です。何故ならば山鉾の大きさと山鉾町内の道路の幅がぴったり合ってるからなんですね。それから先ほどの食の文化といっても加工の仕方、あの辺も民俗技術に残るのに絡んできます。無形の文化財ですから。それから、富山県の城端という町があります。ここも祭りがあります。ある時、町長さんがやって来て「菊池さん、今度道路広げるから人がいっぱい来て、道路いっぱいになるよ」とおっしゃってたんですね。２～３年したらまたやって来られて「菊池さん失敗した」とおっしゃるんです。道路広げると便利になって車がいっぱい通るようになったと。だけど、誰も止まらない。それだけなら、便利になったからしょうがないと諦めるけれど、祭りの時の曳山が貧弱に見えてしょうがない、広げるんじゃなかった、っておっしゃってたんですね。ですから、文化と社会的なインフラ整備みたいな問題でいうと、どうも山とかその祭りの道具が作られた時代とその時の町並みとが連動していることがあるんで、簡単に片方だけというわけにはいかないんだろうなと思っています。

【西村】

はい。ありがとうございます。ちょっともう時間なので終わりにしますけれど、最後にまとめるわけじゃないんですけど、一言。

これから歴文構想は、地域計画に移行されていくと思いますが、今ここで出ているような食文化だとか、民俗文化と場所とのつながりとか、それから、今池邊さんから出た、自然の移り変わりがある意味を持ってたり、民俗的な意味を持ってたり伝承の中にある意味を持ってたりするという、自然現象そのものもやっぱり文化的な発露であるというようなこともあり得るわけですね。若しくは、例えば、それをもっと広く言うと、文化的景観も、これから可能性がある文化的景観まで広げて文化財だと言えば、地域のかなり広い範囲が対象になり得るわけなんですね。それは、農村の方がもっともっと可能性が、都市よりもあるわけで、そういうところまで含めて、地域計画というものを描けるとすれば、そこには無限の可能性があるような気がするんですよね。それはもう補助金があるとかないとか、それも大事ですけど、それは地域としてどうしてもやらないといけないというか、これからの地域の文化的な将来を考えるすごく大きなフレームを作ることになるんじゃないかと思うんです。

そういうことに皆さん方の仕事は向かっているわけで、その中の一部として観光もある、人が伝えることもある、というふうに考えていただくと、その広がりというか役割って非常に大きいんじゃないかと思うんですね。そういうことのネットワークがこれから始まろうとしているわけなので、その意味ではここはすごく大きなことだと思います。そして、今言ったように地域は非常に多様なので、色々なアプローチの仕方があり得ると思うんですね。ですから、他の地域の様々なアプローチの仕方を、学んで、そして伝え合って、それぞれの地域理解を深めていくというのがすごく大事じゃないでしょうか。そういうことの出発点に、今日のような日がなってくれると本当に我々としても嬉しいなと思います。ちょっとまとまりがつかなかったですけれども、これで終わりにしたいと思います。

どうも皆さん方ありがとうございました。